

## ニジェール川中流域の国家形成と非形成

### Sociétés étatiques et non-étatiques dans le Moyen Niger à l'époque pré-coloniale

坂 井 信 三

Shinzo SAKAI

#### Abstract

Les peuples d'Afrique occidentale formaient les sociétés étatiques depuis 10<sup>e</sup> siècle tout en laissant des sociétés non-étatiques aux alentours des États. Les unes et les autres ne se représentent pas comme les étapes d'évolution, mais comme les types différents de la formation sociale. Dans cet article nous allons discuter les relations entre les sociétés de différentes formations pour discerner la nature de l'État pré-colonial dans le Moyen Niger.

Notre champ d'investigation sera divisé en trois régions géographiques: la vallée du Niger, le delta intérieur et la savane méridionale. Les analyses de descriptions des voyageurs de l'époque pré-coloniale et celles des ethnographes au début de colonisation nous montrent les différentes formations typiques des sociétés non-étatiques.

Dans la vallée du Niger, c'est l'union des villages des agriculteurs nommée *kafu*. Les villages composants d'un *kafu* sont représentés comme affiliés selon la segmentation lignagère, mais cachant en réalité des conflits entre les différents groupes lignagères sur le terrain agricole. Par contre dans le delta intérieur, le village a une différente formation sociale à cause de diversification écologique. Ici, le village est composé le plus souvent sur une alliance rituelle entre les groupes aux différents moyens de production. Or la savane méridionale a une formation sociale encore différente; le village compact des paysans de très différentes origines qui se sont rassemblés pour la protection contre les razzias des troupes étrangères.

Nous allons discuter les différentes relations que ces sociétés non-étatiques possédaient avec l'État de Segu, qui surmontait le Moyen Niger au 18<sup>e</sup> et 19<sup>e</sup> siècles. Notre analyse démontrera la nature de cet État qui s'articulait avec le traite négrier de l'Océan Atlantique.

## はじめに

アフリカの国家形成に関する研究は、歴史学や人類学では1960～70年代に関心をよんだ。その代表的な例として、C. コクリ＝ヴィドロヴィッチの「アフリカ的生産様式」論(1969)、A. サウゾールの「分節国家」論(1956)、R. ホートンの「国家なき社会」のタイプ分け(1971)、J. グディー(1971)の「破壊手段」論などを上げることができる。これら研究は、アフリカ諸国の低開発の原因を理論的に解明するという共通の課題を背景として、社会進化の理論やマルクス主義理論を修正してアフリカに固有の国家形成のパターンを探ることに注力していた。

ところが1980年代以降になると、そのような問題意識をもった国家形成論は、忘れ去られたかのように姿を消してしまった。こうした盛衰の背景には、独立後のアフリカ諸国が国家運営に失敗していくという時代の変化に加えて、民族誌的、考古学的事例の蓄積によって、単純なタイポロジーの適切さが疑われるようになったこともあっただろう。1998年に考古学者のスーザン・マッキントッシュが編集した“*Beyond Chiefdoms; Pathways to Complex Society in Africa*”には、国家形成への道筋を発展段階論的な stages によってではなく、さまざまな経路 pathways としてとらえようという認識の変化がよく現れている (McIntosh, S 1998)。

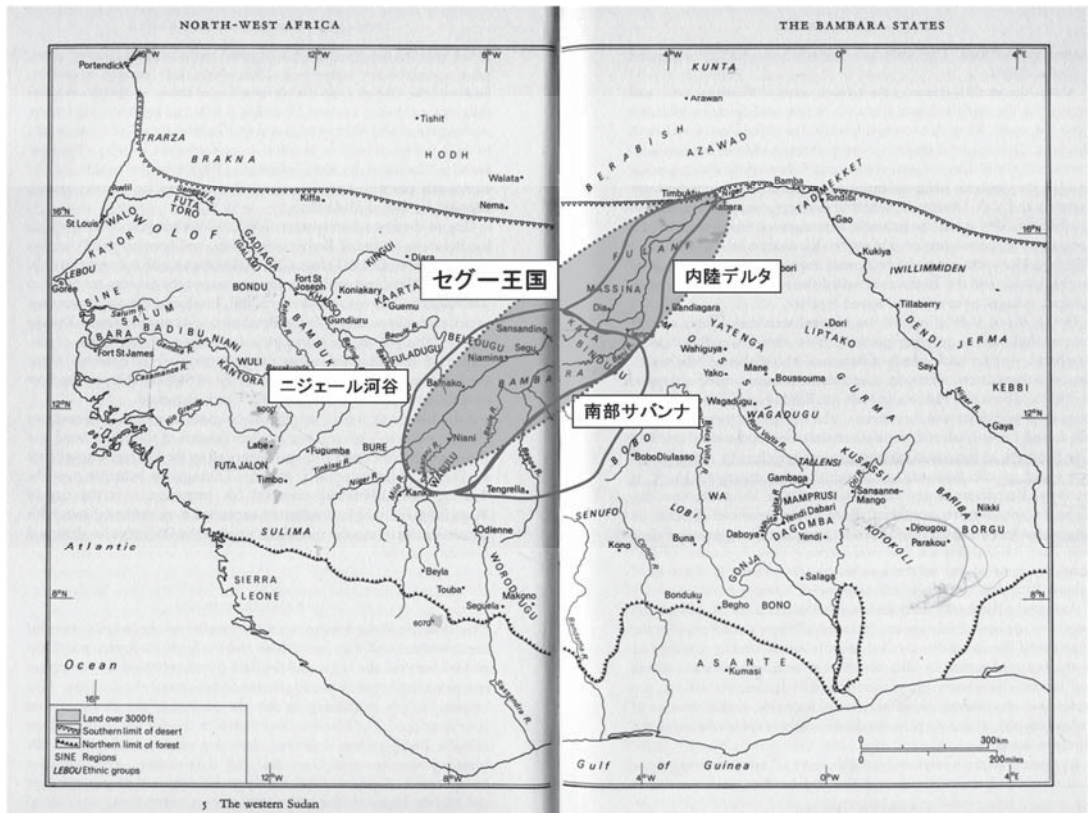
しかしアフリカの国家形成を論じる難しさは、それ以外のところにもあるように思われる。とくに早い時代から国家的統合が出現した西アフリカ内陸では、過去1000年にわたっていつの時代にも国家と国家を形成しない社会とがモザイク状に併存していた。マリヤソンガイのような大帝国を組織した社会のすぐとなりには、頑固に国家に抵抗する農民社会がつねに存在した。大まかにいえば、広い意味で歴史と文化を共有する西アフリカ内陸サバンナの政治空間には、国家形成に向かうベクトルと反対方向のベクトルとがつねに併存し、拮抗していたのである。

こうした状況は、西アフリカでは長期にわたる歴史的状況だった。つまり国家を形成する社会としない社会との併存は、「国家形成がいまだ完全に達成されていない」ということではなく、むしろそれが西アフリカ社会の恒常的な様相だったと見ることもできるのである。そこで本論では、国家を形成する社会としない社会が相互にどのような関係にあったのかを、歴史的・民族誌的資料にもとづいてある程度具体的に検討できる18・19世紀のニジェール川中流域の場合をとおして考えてみたい。

こうした見方から今日改めてアフリカの国家形成を考えてみることは、独立後半世紀以上たった現在でも、解消できない貧困、国民統合の困難、統治の正統性・健全性などの問題を抱えるアフリカ諸国の現実に対する歴史人類学からの貢献たり得るのではないだろうか。

### 1. ニジェール川中流域の領域区分

ニジェール川中流域は西アフリカの歴史的文明の中心地であり、西暦10世紀前後からガーナ、マリ、ソンガイといった広域国家が成立したところである。だが16世紀以前についてはアラブの歴史文献以外に資料が乏しく、具体的な社会統合の形態を論じることは難しい。そのためここでは、歴史資料や口頭伝承資料が比較的豊富で、初期の民族誌的資料も利用できる18世紀から19世紀にかけての時代に焦点を絞ることにする。



The Cambridge History of Africa vol. 4, 1975

この時代、ニジェール川流域ではマリ、ソングアイと続いた中世期の広域国家が解体し、かわりに新興勢力であるバンバラ人がセゲーを中心に勢力を拡大していく。以下に、セゲー王国の支配がどのような形のものだったか、またその勢力下に入った社会と入らなかった社会が、それぞれ内的・外的にどのような社会統合の形態をもっていたのかを記述していくが、その際、地理的・歴史的に区分できる三つの領域を区別する。すなわちニジェール川とその支流バニ川の両岸地帯を合わせて「ニジェール河谷」とよぶことにし、その下流に位置する大氾濫原を「内陸デルタ」、そしてバニ川とヴォルタ川の間広がる地帯を「南部サバンナ」として区分しておく（地図参照）。

### 1-1. ニジェール河谷

ギニア山地に源を発するニジェール川がマンデ山塊を抜けてサバンナに出たところに、今日のマリの首都バマコが位置している。ニジェール川はこのあたりから北東に向かって、平坦なサバンナを流れ下っていく。一方ニジェール川の南側には、バニ川が並行して流れている。この二つの川が流れるサバンナ地帯を、ここでは「ニジェール河谷」とよぶことにする。

この地域はマリンケ人、バンバラ人などの代表的なサバンナの雑穀栽培民の生活域で、二つの川が運んできた土壌のために、年間700mm前後の降雨量があれば安定した収穫が見込めるところである。とくにセゲー近辺は、豊作の年には3年分の収穫量を上げるといわれるほどの豊かな穀物産

地として知られている。雑穀栽培民以外にも、北岸のサバンナには牛牧畜民のフルベ人が少なからずおり、またニジェール川ではボゾやソモノの漁民が漁労生活をおくっている。

こうした生態学的条件に恵まれている上に、ニジェール河谷には東西方向の水上ルートが南北方向の陸上ルートと交差する交易上の結節点がいくつもある。上流から順に、バマコ、クリコロ、ニャミナ、シンサニなどニジェール川の北岸にある町はどれも、岩塩やコーラ・ナッツなどの南北の交易商品が持ちこまれ、戦争捕虜が奴隷として出荷される市場として発達したところである。交易を担ったのは、北のサヘル側ではソニケとよばれ、南のサバンナ側ではマルカとよばれるムスリム商人である。

以上のような地理的、歴史的条件のもとで、ニジェール河谷はマリ時代以来内陸サバンナの文明の中軸を構成していた。18・19世紀のセゲー・バンバラ王国も、同じ歴史的遺産の上に成り立ったものである。

### 1-2. 内陸デルタ

ニジェール川がバニ川を合流させて、きわめて平坦な地帯を網目状に分かれながら流れ下っていくところに、大氾濫原が形成される。これが内陸デルタである。年間降雨量 500mm 前後のこの地方は雨量からいえばサヘルだが、氾濫のために乾期にも乾燥することがなく、多様な水文学的変異に富んでいる。そのため内陸デルタでは、川や沼での漁労（ボゾ、ソモノ）、自然の増渇水を利用する水稲耕作（マルカ）、乾燥地での雑穀栽培（バンバラ）、渇水後の草原を利用する牛牧畜（フルベ）など、エスニック・グループごとに差異化した生業分化が豊かに展開している。しかし広大な氾濫原に分散するデルタの人口密度は、水稲耕作の中心地をのぞいて、ニジェール河谷に較べて半分程度とかなり低い（Gallais 1967 t. 1: 20）。

内陸デルタにも歴史的に重要な交易都市があり、その起源はニジェール河谷の都市よりも古いことが知られている。内陸デルタが北西のサヘルと接するマーシナ地方には、ジャがある。伝承によれば、ジャは内陸サバンナ全域に広がったムスリム商人の故地とされる。だが17世紀以降、ジャは川の流路の変化によって商業上の重要性を失ったようである。一方、内陸デルタが南東のサバンナと接するところにあるのがジェンネである。マリ時代以来、ジェンネはニジェール川本流の水運によってトンプクトゥと連絡し、サバンナと砂漠を連結する内陸交易の最大の拠点になった。

内陸デルタはニジェール川流域の社会にとって、物的生産面でもロジスティックの面でも重要な後背地をなしていた。だが考古学者のマッキントッシュらが指摘するとおり、内陸デルタでは西暦 1000 年紀末まで分散的な居住形態が優勢で、中央集権化した権力機構の存在がうかがえない（McIntosh 1998）。その後集住が始まって、たとえばジェンネは王権を組織したことは歴史上一度もない。のちに見るように17・8世紀のジャが小王国を形成したことはあったが、19世紀初めにフルベ人がジハード国家を形成するまで、内陸デルタから国家的な支配を立ち上げた勢力が出現しなかったことは注目に値する。

### 1-3. 南部サバンナ

内陸デルタの交易都市ジェンネやニジェール河谷の市場町からは、金とコーラ・ナッツを産出する南の森林地方に向かって幾筋かの交易路が伸びていた。重要な中継地としては、北から南にテングレラ、ボボ＝ジュラソ、コンなどがあり、内陸デルタから移住したムスリム商人ジュラがその交易を取り仕切っていた。一方それらのルートの東方には、一群のモシ系の諸王国があり、別の交易

ルートがあった。両者の中間にあたるバニ川とヴォルタ川の上流域がここでいう南部サバンナである。

住民は雑穀栽培を生業とするミニャンカ、ボボ、ブワ、セヌフォ、サモなどを中心に、同じく雑穀栽培に従事するマルカやダフィンがニジェール河谷から移住して入りこんでいる。セヌフォの一分派でありながら言語はバンバラ語を話しているミニャンカの例を見てもわかるとおり、この地域の住民はニジェール河谷の歴史的文明の諸要素を深く受容している。もっとも、マリ時代までさかのぼる村も決してめずらしくないニジェール河谷と比較すると、この地方の村々の歴史的深度はそれほど深くないようである。またこの地方は生態学的な多様性に乏しく、牛牧畜のフルベ人以外にはほとんどの住民が雑穀栽培民である。また主要な交易ルートから外れていたために、商業も目立っていない。

18・19世紀の政治状況でいうと、この地帯は北のバンバラ王国、南のコン王国、東のモシ系諸王国という有力な国家的勢力に取り囲まれた緩衝地帯のような位置にあったところである。そういう言い方をすると、この地域を一つの領域として特定する積極的な理由はないように思えるかもしれない。だが南部サバンナは、政治的に見ると一つの注目すべき特徴をもっている。それはこの地方の住民が自ら国家を形成したことがないだけでなく、一貫して周囲の有力な国家に抵抗してきた歴史をもっていることである。今日の国境区分でいうとマリとブルキナファソにまたがるこの地方は、植民地支配下に入った20世紀初めにも、第1次世界大戦時の徴兵をきっかけにフランスに対する激しい反乱を起こしている。

## 2. 社会的統合の諸形態

ニジェール河谷、内陸デルタ、南部サバンナという以上の三領域は、基本的に共通の社会編成をもっている。

地理学者のガレは、年間降雨量が500mmから1500mmの範囲に収まる西アフリカ内陸サバンナでは、限られた雨期に農耕労働を有効に組織するための内的な制度と経済的一体性をそなえた「村」が、基礎的な社会単位となっていることを指摘している（Gallais 1960）。実質的にいえば系譜にもとづく親族集団とそれを横断する機能的組織の二種の社会組織が、村という社会組織の基礎的な構成要素をなしているということである。そうした複合性は、地域の歴史的な展開をとおして具体的な形態をとっている。その主要な構成要素を上げるなら、次の四つになるだろう。

第一に生業分化に深く結びついた民族分化とそれを前提とする経済的交換のシステム。第二に父系祖先の誉め名 (*jamu*) を共有するクランとそれを基礎にした自他の社会的位置づけのシステム（たとえば儀礼的な同盟関係、慣習的な仇敵関係と婚姻関係など）。第三に年齢集団に基礎をおく若者組や狩人結社などの機能的なアソシエーション。これら三つつの水平的な分化に加えて、第四に自由民、専門職人、奴隷の三身分システムという垂直的な分化である。こうした社会的分化にもとづく社会編成の様式はエスニック・グループのちがいを越えて広がっており、おそらく歴史上のマリ帝国の影響下で構成され、さらにその解体後におこった拡散によって普及したものと考えられる（坂井 2003, Tamari 1991）。

こうした社会編成の基本的な特徴を共有しながらも、ニジェール河谷、内陸デルタ、南部サバンナの三領域は、地域社会の政治的な統合形態においてはかなりちがった形を示している。そこでで

下では、村と村を越える社会の編成様式に注目しながら整理してみよう。

## 2-1. ニジェール河谷のカフ

ニジェール河谷の地域社会は、上流域から中流域にわたってどこでも、村々をまとめる「カフ」(*kafu, kafa*) とよばれる単位からなっていたことが知られている (Labouret 1941, Person 1968, t. 1)。

カフはランドスケープ上の目印によって大まかに境界づけられる空間に広がる社会単位で、普通複数の異なる親族集団の集合から構成されている。具体的な事例を見ると、カフは大体半径 20 から 30 キロ程度の空間に、10 から 20 の村と附属する集落を包摂していることが多い。

カフには中心村落があり、そこに最初に住みついたとされる親族集団のシニア・ラインの家長が、土地の精霊祭祀を担う首長 (*kafu-tigi, masa, mansa*) をつとめる。のちに首長の住む集落から分村した村は、親族集団の分節関係によって位置づけられる。その他の集団は、遅れて移住してきて先住の首長に居住を許されたという伝承によってカフに包摂される。このようにカフは複合的な住民構成を、土地の精霊祭祀に基礎づけられる先住権と親族の分節システムという社会的・文化的枠組みをとって組織する社会統合の様式である。

カフの首長は住民の居住、耕作、狩猟、家畜飼育などの土地用益権を裁可するが、住民からは慣習的な贈与を受けるだけで租税を徴収することはなかった。カフの領域内に住む住民は、親族集団ごとに生産の面でも消費の面でも自律していた。首長は市場を開催する権利をもち、一定の上納金を受け取っていた。また首長は司法権ももっていたが、それは紛争の調停を主としており、死刑を科すような最終的裁判権はもっていなかった。同様にカフは軍事組織をそなえておらず、戦争、防衛などの軍事行動は村々の年齢組織を基礎に集散的に担われた。

カフの成立伝承は、典型的にいうと旅の狩人が精霊の啓示やマラブーの勧めによって無人の土地に住みつき、村を作ることから始まる。もっとも個々のカフの具体的な成立経緯を見ると、首長権の編成は歴史的事実というよりもイデオロギー的構成という性格が強いことがうかがえる。

たとえばアムセルがマリ南部ワスル地方の Bagayogo クランのカフ (Keleyadugu) について記述しているケースを見てみよう<sup>註</sup>。このカフの伝承上の創設者 Keleya Mansa が後に Keleyadugu になる土地にやってきたとき、そこにはもともと土地の主だった Kuruman クランと、後から移住してきて首長の地位を奪った Taraware クランの住民が住んでいた。Keleya Mansa は Taraware と同盟して Kuruman の住民を征服、追放、奴隷化し、あるいはクライアントとしてリネジに吸収した。こうして首長位についた Keleya Mansa の地位はシニア・ラインの息子が継承するはずだったが、実際には分村してさらに周辺に軍事的征服を広げたジュニア・ラインの息子が実力で優勢に立った。こうして首長位はジュニア・ラインに移ったが、Keleyadugu の Bagayogo は「われわれはみな兄弟だ」という言い方で、現実の政治的闘争を親族的イディオムによって覆いかくしている (Amselle 1998)。

サマケも、マリ南部ブグニのあるカフ (Cendugu) についてよく似たケースを記述している (Samake 1988)。それによると、のちに Cendugu になる土地に Kone クランの狩人がやってきたときにはすでに別のクランの住民がいた。新来の狩人は在来の集団の女性をめとり Koroba 村を拓いて息子 Wojuma が生まれた。この Wojuma が新たなカフの首長になる。その後母村から分れた Wojuma の息子の一人が、セゲーのバンバラ王国の支援を受けて周辺の村々を征服し、それぞれに

注) 以下、本稿では英仏語からの引用の場合、固有名詞をアルファベット表記する。

自分の息子たちを住まわせてカフを拡大した。その結果、母村のシニア・ラインと分村のジュニア・ラインの関係は組み換えられ、ジュニア・ラインが首長位への優先権をもつことになった。もともと Cendugu に住んでいた人々や征服された村の人々は、Kone クランの同盟者やクライアントとして位置づけられた。

つまりこれらのケースでは、すでに存在していたカフに対して軍事的征服がおこなわれたり、創設されたカフの中からさらに野心的な個人による征服がおこったりしても、その都度再編成される社会組織は、やはり主要親族集団を中心とする親族システムによって秩序づけられているわけである。

親族システムに基盤をおく農民の共同体は、土地の用益権を先行世代の優位にもとづいて配分し、決してそれを手放そうとしない。加えて農民共同体は、親族集団内の特定の分枝がひとり優位に立つことを認めず、つねに分節システムに服従させようとする。このような親族の原理の結果として、農民共同体はそのまま拡大して国家に発展することがない。事実上の人口増加によって分節間にアンバランスがおこると、親族集団は分裂や実力行使によって分節関係をリセットして再出発する。18・19世紀のニジェール河谷の地域社会は、このようにある程度の持続性をもちながらも再編をくり返すカフのモザイクによって占められていたと見てよいだろう。

## 2-2. 南部サバンナの村

これに対して、南部サバンナと内陸デルタの社会統合は別の形をとっていた。まず南部サバンナの場合から見てみよう。

上述のように、南部サバンナにはマリ由来のクラン・システム、専門職人制が浸透しており社会統合の形式も部分的に共通しているが、全体としてみると明らかに異なっている。ここでは主としてソールとロイヤールによる20世紀初頭の反乱に関する研究 (Saul and Royer 2001) を利用して、植民地化以前の社会統合の様相を素描してみよう。

ボボ、ブワ、マルカ、ミニャンカ、サモゴ、グルンシなど、この地方の住民の村に関してもっとも目立つのは、千人規模の人口をもつコンパクトな村が、連続する壁に囲まれた堅固な要塞のような形をとっていたことである。1887年にこの地方を旅行したフランスの軍人バンジュールの旅行記には、そうした村の挿絵がいくつか載せられている (Binger 1892)。

社会的に見ると、これらの村は複合的な住民構成をもち、世代、先住権、土地祭祀などに基礎をおく多様なハイアラキーが併存・交錯する複雑な自治体制をそなえていた。しかもそうした村々はそれぞれに自律しており、村同士を結びつける恒常的な政治的紐帯は存在しなかった。

まず村から見ていこう。今日のブルキナファソの Dedugu 地方に関するソールとロイヤールの記述にしたがうと、この地域の社会の基礎的単位である村は、ニジェール河谷の村よりも複雑で複合的な構成をもっており、村を構成する集団間の争いと緊張によって、村の内部でも離合集散が起こりうる可変的な組織だったことがわかる。

村の中の最小の政治的単位である区画は、複数の父系親族ユニットの近隣関係からなっている。ユニット間では父系や母系の出自関係をたどることができる場合もあるが、そうでない場合もある。それぞれの親族ユニットは、村の中の他の区画や他の村の住民との間にも親族関係を広げており、それを足場に、場合によっては村の中で、あるいは村を越えて居住地を変えることもありうる。

伝承によると、二、三百年前にはこの地方の社会は分散する小規模な村からなっていたらしいが、不安定な治安状況のためにそれらが集合して、コンパクトな村を形成するようになったようだ。村

を構成する経緯は、典型的には二人の狩人の出会いの伝承で語られる。相互に面識のない二人が出会って一緒に住み始めるにあたって、一方の狩人が先住権を取得するのを他方の狩人が承認する。ソールとロイヤールはこのタイプの伝承を、村が必ず複合的な構成をもちながら同時にその構成要素の間に上下関係があること、いいかえれば村は、それらの要素間の優先順位とともに共同をも必要とするという原理を裁可するものだとしている。

以上のように、南部サバンナの社会統合の基礎的単位である村は、内的な複合性と統合性を合わせもちつつ、つねに離反と再統合の可能性も合わせもち動的な共同によって成り立っていたことがわかる。ここでは不安定な治安状況を背景とする頻繁な離合集散のために、主要親族集団の分節システムをもとにカフのような安定的な組織を志向するのではなく、複数の集団からなる臨機応変で実効性のある共同関係を社会統合の核においているのである。

村がこのように編成変えの可能性をそなえているとするなら、村の間の関係も同様に可変的である。ニジュール河谷のカフでは、先住権を根拠づける精霊祭祀がカフ内の村間の関係を整序していた。南部サバンナでも、先住権を根拠づける精霊祭祀は重要な要素であるが、その機能は異なっている。ニジュール河谷では精霊の祭祀権を最初の集団だけに限定することでカフの一体性を保証していたのに対して、頻繁な移住のおこる南部サバンナでは、精霊祭祀は空間的にも時間的にも社会空間を一体化する機能をもたず、反対に複数の祭祀の併存をとおして複雑化した社会空間を編成する手がかりを与えている。最初の集団から分離した集団は、最初の祭祀の優先権を承認しつつ自分たちの祭祀をもつことができる。こうして地域内に生まれてくる祭祀のハイアラキーは、それ自体として地域の政治的統合に力をもっているわけではないが、状況によっては政治的に活用されることもありうるのである。

ソールとロイヤールによる以上のような記述は、植民地化初期の状況を反映するもので、それをそのまま植民地化以前の18・19世紀に投影することは危険だろう。とはいえ、植民地化以前の時代は、まさにこの地方がバンバラやモシの軍隊による奴隷狩りにさらされていた時代であり、臨機応変の共同がもっとも必要とされていたときなのである。

### 2-3. 内陸デルタの儀礼的同盟

以上の二領域に較べて、18世紀頃の内陸デルタの社会統合の様子を復元することはかなり困難である。それは19世紀初めにおこったフルベ人のイスラーム国家ディーナによって、社会統合の形が大きく改変されたからである。そのためここでは全体的な統合様式を記述するかわりに、他の領域との相違に注目しながら検討を進めることにしたい。

最初に気づくことは、一般に内陸デルタではニジュール河谷のカフのような形態の統合が見られないことである。ガレの記述を見ると、17世紀頃からデルタ南縁の乾燥地帯に入りこんだバンバラ人が、Sarroにかなり強力なカフ（ここでは *dugu* とよばれる）を構成していたことがわかるが（Gallais 1967: 192）、それ以外にカフの存在に関する記述は見あたらない。

もちろん内陸デルタでも社会の基礎的単位は村である。だがデルタの住民は多様な水圏学的条件に応じて異なった適応をする漁民、農民、牧畜民からなっているため、たいていの村は異なる生業を営む集団の共住によって成り立っている。そのためそれぞれの住民は、それぞれの資源について自律した権利を確保している。たとえば牧畜民フルベは、人間の居住地、夜間に家畜を入れる家畜囲いの土地、村周辺で飼う乳牛のための牧草地をセットにしてもち、漁民ボゾは氾濫原の沼や小河川ごとに漁業権をもっている（Gallais 1960）。



このようにそれぞれの集団の生業基盤が異なっているので、内陸デルタでは農民のカフのように土地祭祀が社会統合の共通の手がかりとはならない。そのかわりに持ち出されてくるのが、相互不可侵と相互扶助を義務づける集団間の儀礼的同盟である。

内陸デルタの村の起源伝承では、ほとんど必ず異なる生業集団間の儀礼的同盟が語られる。この種の伝承では、まず先住民である集団が地下の穴の中に住んでおり、後から来た外来者が先住民を穴から出して同盟を結び、一つの村を作ることになる。伝承では、それぞれの集団は必ずクラン名 (*jamu*) で特定される。

たとえば竹沢の記録するヌーの起源伝承を引用しよう。ボゾのロンディの祖先は犬を連れた狩人で、マンデからやってきた。彼がこの土地に来たとき、穴の中に住んでいるマルカ (農民) のトモタを見つけた。それはロンディが日に干しておいた肉をトモタがたびたび盗んだことがきっかけだった。ロンディはトモタに罫をしかけ、おびき出して血盟を結び、一緒に住むようになる (竹沢 1997:289)。

同様の伝承は非常にたくさんあり、私も数多く聞いた。ジャの伝承を示そう。今のジャの町があるところに穴があって、そこにマルカのトモタが住んでいた。別のところにはボゾのクワンタがキャンプしていた。二人はお互いのことを知らなかった。クワンタはとった魚を干物にしていたが、それが頻繁になくなる。そこでクワンタは計略を立て、魚の薫製を作るかまどのまわりに灰をまいておいた。案の定、翌日灰の上に足跡がついていた。クワンタは足跡をたどっていき、穴の中に住むトモタを見つけた。二人は穴の外で一緒に暮らすことにし、決して相手を侵害せず、決して通婚しないことを誓い、冗談関係の同盟を結んだ (坂井 1997:246)。

これらの伝承はほとんど神話的な色彩をもっているが、もう少し歴史的な伝承もある。たとえば、おそらく数世紀前にデルタに移住してきたフルベに関わる伝承を見てみよう。

ダジェの示すニャンブー村の起源伝承では、そこに最初に住みついたのはボゾのクワンタで、ずっと遅れてフルベのディッコが移住してくる。穴の中に住んでいたクワンタは、自由に漁をしてよいという条件で、ディッコの求めに応じて穴から出て血盟を結ぶ。その結果、ディッコは牛を飼い、奴隷を使って畑を耕し、クワンタは漁を続けて一つの村を作ることになった (竹沢 2008:267)。

こうして異なる生業集団の共住によって始まった村の、その後の発展に関する伝承もある。ここでは、先住者が首長位の取得を嫌い、かわりに後から来たものが首長になるというパターンがよく見られる。

たとえばヌーの例では、はじめの二つに加えてさらに二つの農民のリネジが加入する。三つの農民のリネジが漁民のロンディに首長になるよう頼むが、ロンディは断る。そこで最後に来たりネジが自ら望んで首長位をとり、ロンディは以後その語り部の役を引き受ける (竹沢 1997:289)。ジャの例でも、移住者が増えて村の首長を選ぶとき、先住者のマルカとボゾはそれを断る。そこで、最後にやってきた外来の戦士ジャワラに首長位が与えられる。ジャワラは先住権を留保するトモタとクワンタとの間に血盟を結び、決して権利を侵害しないことを誓う (坂井 1997:251)。

この首長位のあり方は、ニジュール河谷のカフとも南部サバンナの共同的な村ともちがっている。首長位は精霊祭祀に依拠するのではなく、共同体全体の儀礼的契約によって、村の構成要素である一集団に付与される。つまりこのタイプの伝承をもつ内陸デルタの村は、カフのように構成要素の複数性を特定集団中心の親族システムに吸収してしまうことを許さず、また南部サバンナの共同的な村のように集団間の利害による組み換えも許さない、構成要素となる諸集団の自律と相互の干渉

排除を規定する儀礼的同盟の上に立った共同という体制を、少なくともイデオロギー上はもっていたことになるだろう。

ただし、ニジュール河谷のカフが親族システムの外見の下に政治的闘争を覆いかくしていたのと同様に、儀礼的同盟も冗談関係の下に社会的な不平等を抑えこんでいることを忘れてはならない。村の起源伝承も首長選びの伝承も、同盟の締結と同時に集団間にハイアラーキカルな関係が導入されていることを語っている。内陸デルタの社会統合は、生業集団の異なるエートスの対等性と同時に政治的な不平等性をも、村という社会組織の統合的要素として規定するのである。

しかし以上は起源伝承から演繹したモデルであり、実際の地域社会の統合がどのようなものだったのか、やはり不明な部分が多い。ここでは、フルベのジハード以前のジャの体制を記述してみよう。

ジャは考古学的には2000年前までさかのぼる居住の歴史をもっており、おそらく非常に古い時代から交易と宗教的な聖地として栄えた町だった。私が聞いた古い伝承によると、かつてジャは独立したいくつかの大きな集落からなり、その全体を支配する王や首長はいなかったという。考古学的に見ると、1000年紀末の気候変動によってジャカ川の水流が変化するころから衰退が始まり、多くの集落が放棄されて現在の集住形態をもつ現在のジャの町に移行していく (McIntosh 1998)。

一方マリの口頭伝承研究者である Alamami Maliki Yattara 氏の情報によると、ジャはもともと武力をもっていなかったが、移住してきたフルベ人の人口が増え、たびたび略奪がおこるようになって外来の武装集団を受け入れたのであるという。アッサーディーが記録しているように、16世紀末にソングイ帝国が崩壊するとデルタ各地でフルベ人とバンバラ人の抗争が激しくなる。おそらくその時期が、ジャがジャワラの戦士を首長として受け入れた時期なのではないだろうか。ジャワラは周囲の村々に略奪をくり返し、ジャと周辺のいくつかの村を含む王国に成長する。

ジャワラは「ジャの王」(*dia maghan*)の称号を唱え、外来の戦士からなる軍団(*sofa*)を擁していた。ジャは、南の Sarro、西の Monipe のカフとたびたび武力で衝突して相互に略奪をくり返し、町の周辺にはソファと農耕奴隷を住ませた集落を配置していた。またバンバラ王国が台頭してくると、セゲーの要請に応じて軍を送ることもあった。数千人の住民を擁するジャはコンパクトにまとまった都市を構成し、四つの門をもつ城壁で防備されていた。

おそらく17・18世紀のジャは、ニジュール河谷のカフ以上に軍事的な形態をそなえた小国家を形成していたと見てよいだろう。だがその「国家」には留保が必要である。というのも、ジャワラの体制下でも、住民にとって王は共同体の一構成要素であり、相互不可侵の儀礼的同盟によって権限を付与された首長以上のものではなかったからである。

王はカフの首長と同じような権限をもっていた。たとえば移住者に居住地と農地を配分する権限、町の共同漁の日程を決める権限などである。しかし慣習的な贈与以外に、租税はなかった。王はジャとその周辺の村々に対する裁判権をもっていた。その裁判権はカフの首長のように調停を主とするものではなく、王の呪物の力によって服従を要求する強制力をもつものだったことは注目すべき点である (Sakai 1992)。

とはいえ町の行政は住民の自治組織トンによって運営されており、町の警護はボゾが担当するなど、町の統治に対して王は大きな権限をもってはいなかったらしい。たとえば、王とその兵が住民の権利を侵害することは強い抵抗を受けたようである。先住民としての権利を留保したトモタのリネジには、ジャワラとその兵に対して同盟を盾に素手で抵抗したスルフィン・トモタという英雄の伝承がある。

このように少なくとも町の住民は、ジャワラに対して慣習的な首長以上の権限を認めようとしなかったと思われる。そのジャワラが、王としての権力を維持するために大きな役割を果たしたのは、奴隷とクライアントだったと思われる。ジャワラの王はしばしば近隣の村々に対して略奪をおこない、捕虜を奴隷として売ったり農耕奴隷にしたりした。またこの時代、ジャには数多くのイスラームや非イスラームの宗教職能者が移住しているが、そのほとんどがジャワラの王をパトロンとして町に住みついたという伝承をもっている。クライアントを多くもつことは、さらに多くのクライアントを引き寄せる手段になる。こうして王は、対外的に強力な王としての権力を誇示することができたのではないだろうか。

ジャの王権に関する解釈は、竹沢と私とでは多少異なっている。竹沢はジャの王権を内在的な要因によって成立したものと見ていて、私は上述のように、それは不安定な治安状況に対応する対外的な軍事的性格のもので、対内的には慣習的な首長権を超えるものではなかったと考える。その解釈を支持するものとして、ジャと同様の起源をもつジェンネの場合を参照してみよう。

ジェンネもまた、先住民であるボゾと後から来たマルカの同盟によって成立したという伝承をもっている。ジェネウエレとよばれる首長位はマルカがもっていた。モンテユによれば、ジェンネの町の統治は住民の中の特定のクランから選出される首長の下で招集される住民の評議会にゆだねられていた。評議会は市場を管理し、略奪者を追いはらい、必要があれば傭兵部隊を雇う資金を支出することもできたという (Monteil 1932)。アッサーディーは、モロッコ軍の支配下でもジェンネが自律の姿勢を崩さず、17世紀初めにジェネウエレを処刑したモロッコ軍に対して住民が一致団結して反抗し、譲歩を引き出したことを記録している (*Ta'arikh as-Sudan* : 248-9, 仏語訳 380-81)。同時期に町の衰退を経験したジャの場合には、防衛上の必要のために導入された戦士団が、結果的に軍事的王権を組織することになったのではないだろうか。すなわちそれはジャの町にとっては偶発的な歴史的状況によるもので、内在的な社会統合の要求から生まれたものではないと、私は解釈する。

ジハードによるイスラーム国家建設を経験した内陸デルタでは、それ以前の社会統合のあり方を復元するのが困難だが、ニジェール河谷と南部サバンナとの対比でいえば、その原理は異なる生業集団の自律と儀礼的の同盟に基礎づけられた首長権を特徴としていたといえるだろう。

### 3. セゲー王国の支配

以上の記述から、ニジェール河谷、内陸デルタ、南部サバンナの社会がそれぞれに異なった社会統合の形態をもっていたことがわかった。おそらくそれらの形態は、それぞれの領域の地理的・歴史的条件を背景にもちながら、18世紀の初めに成立したセゲー王国の支配との直接間接の交渉のもとで形成されていったものだったのだろう。

以下ではまずセゲー王国がどのような経過をたどって成立したのかをふり返り、その上で、セゲーの支配が上に記述した三つの領域の社会統合の形態とどのように関わっていたのかを検討しよう。

#### 3-1. 王国の成立

セゲー王国は、ニジェール河谷のカフのモザイクの中から出現してきた。その経過を伝承によっ

てたどってみよう。

モンテユの収集した伝承（1924）によると、後にセゲー王国の中核になる地域には Doua 村に拠点をおくソニンケ人の Boare クランのカフがあった。このカフに移住してきたバンバラ人のある狩人が、Dina というカフの首長だった Wara Diara の娘をめぐって Segu-koro 村に定住した。その息子の一人が、セゲー王国を建国した Mamari Kulibali で、またの名を Biton Kukibali という。

成長したビトンは、Boare クランのカフに属する村々の若者たちが組織する若者組トン (*ton*, *flan ton*) の中で頭角をあらわし、その頭目 *ton tigi* になる。彼の母は、お気に入りの息子だったビトンとその仲間たちのために、しばしばビールや蜂蜜酒を醸して宴会を開いてやっていた。ビトンの若者組の盛んな様子に、自由を求める奴隷身分の男たちもすすんで仲間入りし、トンの規模は拡大していく。次第に規模が大きくなる宴会のために、トンは「蜂蜜酒代」(*di songo*) という名目で村々から協賛金を徴収するようになる。そうした中で、長老たちは若者たちがトンの楽しみのためばかりに活動し、親族集団の共同労働をないがしろにしかねないと不安を抱くようになっていく。

一方外来者であるビトンのプレゼンスが大きくなっていくにしたがって、カフの首長位をもつ Doua 村の若者たちとの確執も厳しくなる。長老たちもその争いを収めることができなくなり、ついにトンは分裂する。こうしてトンの確執はカフの中心村落とその他の村との確執に拡大・変質し、最終的にビトンは母方オジであり姉妹の嫁ぎ先であるカフ Dina の支援を得て Doua 村とその同盟村を殲滅してしまう。

対抗勢力を排除したビトンは、自分の意のままに動く軍団をもつ必要を痛感する。そこで彼は策略を使う。トンの最初からのメンバーだった Dukuna と Banankoroni の仲間たちに、それぞれの村の長老たちを相談役としてセゲーに常駐させてほしいと依頼し、そして若者たちが戦闘に出かけている間に、長老たちを虐殺してしまったのである。長老を失い、リネジへの帰属を失ってしまった若者たちに、ビトンはいった。「おまえたちの長老は自由身分でいようとして殺され、埋められたのだ。おまえたちが村に帰っても、もう女と奴隷しかいない」。抵抗するすべのない彼らは、結局ビトンの奴隷となり、自由身分の若者組トンは奴隷身分の軍団 *ton jon* に再編成された。こうして常備軍をもったビトンはその首領となり、周辺のカフを次々と服属させてセゲー王国を築いたのである。

以上は口頭伝承であり、もちろん歴史的事実ではない。だが伝承であるだけに、カフが国家に成長していく過程で何が最大のネックとなるのか、その問いをめぐる人々の思考が生き生きと描き出されているといえる。そのネックとは、まさに親族システムなのである。

メイヤスは「家族制農耕共同体」論において、機能主義的な社会人類学が描き出すのとはちがう、リネジの内的な政治力学を分析している（メイヤス 1977）。それによれば、農耕生産のメカニズムと生産関係を再生産する家族のメカニズムが一体となった「家族制農耕共同体」において、生産物と労働力を配分する権力を握る長老が支配者の地位に立ち、若者と女性は労働力と生殖力を搾取される被支配者の立場におかれる。若年世代は生存と生殖に不可欠の資源（種と妻）を、年長世代に依存せざるを得ないからである。論理的にいえばこの対立が農耕リネジの分裂と移住を引き起こすわけだが、それはまた新しい土地で新しい共同体を再出発させるとしても、「家族制農耕共同体」の論理そのものの乗り越えはおこらない。

カフの成立・発展の伝承は、このような「家族制農耕共同体」の論理を表現する親族イデオロギーに依拠して語られている。セゲー王国の伝承も、ビトンが首長の村を征服する時点までは、「家族制農耕共同体」における世代間の確執として語られている。その後彼が同じ親族イデオロギーに依

拠してクリバリ・クランを中核とするカフを築いたなら、セゲー王国は勃興しなかつただろう。しかしここで親族システムとは別の論理にしたがう社会集団が登場する。それがトンである。内陸サバンナの村についてガレが指摘しているとおりに、限られた雨期に農耕労働を有効に組織するために、親族集団を横断して組織されるのが若者の組織トンであり、それが村の活動に経済的な一体性を与えている。つまり親族システムとならんで村という社会統合に不可欠のシステムがトンであり、それが親族イデオロギーの乗り越えに活用されたのだと理解できるだろう。

ただしここで注意すべきことは、メイヤスーが指摘するとおりに親族システムが生産構造の再生産を目指すのに対して、トンは生産ではなく消費を目指しているということである。トンの機能的な存在理由が、親族集団だけではまかないきれない農耕労働力を組織する点にあることは確かである。だが社会組織としてのトンは、祝宴という儀礼的蕩尽を契機として自己を再生産するアソシエーションという性格をもっている。つまり親族システムとトンのアソシエーションは、生産と消費をめぐって自律的に機能する農民社会の二つの構造的契機を表現しているのである。

ピトンはこの相補的な二つの構造契機の関係を決定的に変質させた。長老たちの虐殺は文字どおり親族原理を否定しただけでなく、同時にトンの本質にも変更を迫るものでもあった。すなわち親族原理の否定によって農民社会のトンは奴隷身分の職業戦士集団トン・ジョンに転換され、これによって村を越えた権力を保有する固有の機関が出現することになるのである。モンテイユは、このトン・ジョンを核として個別の機能を担う部門（国家に帰属する兵・奴隷 *furuba jon*、鍛冶師・楽師など特定の職能をもつ職能者、軍馬を取り扱うフルベ人奴隷、水運を司る隷属民ソモノなど）の集合体としてセゲー王国の機構を記述している。ピトンはこの機能集団の首領として、カフの首長位を示す *masa* ではなく、*fama* 「力ある者」という称号を名乗った。ピトンはまたこの機能集団固有の呪物を祀る祭司をつとめた。呪物はファマとその軍団がもつ恐るべき力の源泉として表象され、ファマとトン・ジョンはセゲーの仇敵をこの呪物の生贄に供したといわれる。ピトンの死後、セゲー王国は王位継承をめぐって一時混乱するが、結局トン・ジョンの中から出現したンゴロ・ジャラの開いたジャラ王朝のもとで、1861年まで存続することになる。

カフのモザイクの中から出現したセゲー王国は、地域社会の統合の要素である若者の労働組織＝トンを権力行使のための自己目的的な組織に変質させることによって、親族システムを超越した国家を形成したことに注目しておこう。

### 3-2. 王国の支配

こうして成立したセゲー王国の支配は、ニジュール河谷から広がって内陸デルタにまでおよんだ。一方南部サバンナに対する支配は恒常的な形ではなく、くり返される略奪という形をとったようである。以下、それぞれの領域とセゲーとの関係を整理していこう。

#### a. ニジュール河谷

セゲーはニジュール河谷のカフに対して圧倒的な軍事力で臨み、服属して人頭税を納めるか、それとも略奪されて奴隷化されるかを迫って支配地域を広げていった。バザン（1982）によれば、*ni songo*（身代金）とよばれた人頭税はもともとトンの宴会のための協賛金（*di songo*）から派生したもので、額としてはそれほど過重でなく、支払わないで征服されるよりも支払って保護下に入った方が農民の村にとっては無難な選択だった。とはいえセゲーの中央権力がゆるむとすぐに農民の村が離反することも多く、再征服、再服従がくり返されることもあった。

だがセゲー王国の支配は、農民のカフにとってたんに理不尽な暴力であるだけではなくだった。先にカフの成立経緯を記述したとき、親族システムに依拠しているはずのカフにしばしば軍事的征服がおこっていたことを指摘した。実際カフは、親族システムの外見の下に、異なる親族集団間の葛藤や同じ親族集団内の分枝間の葛藤をつねに覆いかくしていた。そこで Cendugu の事例のように、カフの中で新しい動きを起こそうとする者は、セゲーの支援を期待することができた。バザンの言葉を借りれば、「セゲーの権力は地域社会にとって二つの顔をもっていた。それは圧倒的に強い外部の勢力であり、かつ利用できる手段、つまり隣村との葛藤やリネジの分枝間の葛藤の際に頼りになる傭兵部隊でもあった」のである (Bazin 1982: 355)。

このように国家はその権力機構を用いて、親族集団の発展サイクルに起因する葛藤をつねに内包した農民のカフに介入することによって農民社会に対する支配を実効化し、一方カフは国家の権力機構を利用することによってカフ内の権力関係を再編し、さしあたりの安定を得ることができた。それだからこそ国家は、カフという社会統合そのものの改編に乗り出すことはなく、人頭税を支払っているかぎり国家の支配はカフの内部におよばない。しかしまたその限りで、セゲー王国はカフを権力機構の再生産に役立てることもできた。というのも、カフを支配する親族システムの中で長老に反抗する若者は、ピトンのように自ら革新的な動きに出なくても、トン・ジョンに身を投じて自立の道を追求することができたからである。このようにニジェール河谷においては、カフの親族システムと王国の支配の論理とは、それ自体としては両立しえないが、分離している限りで相互に依存し、一種の機能的な連関を構成することができたのである。

そういう意味で国家は、逆説的にカフに立脚していた。だがカフへの威嚇と介入は、国家が十分に威圧的な力をもつことができないと有効に機能しない。しかしその力の源泉をカフに求めることはできない。そこから国家にとって対外戦争の必要が生まれてくる。

実際セゲー王国にとって、支配領域外に対する戦争と略奪は国家組織の再生産に不可欠のメカニズムになっていた。セゲー王国は、西に隣接するカアルタ王国を仇敵として戦争をくり返していた。1796年にこの地方を旅行したマンゴ・パークは、一方の軍隊が攻め込めば他方の軍隊は村々を略奪にまかせて拠点村落に籠城し、ときをおいて相手方に攻め込んで復讐する機会をうかがうという、両国の戦争の様子を記録している (Park 1815 (2000) : 137-139)。この種の国家間戦争は征服戦争ではなく、周期的に反復される略奪によって軍団を維持・強化する社会的メカニズムだったのである。

#### b. 南部サバンナ

南部サバンナは、ドラフォスやモンテイユら植民地時代初期の民族誌家の示すピトン・クリバリの征服した地方のリストに入っておらず、その後のジャラ王朝の征服も受けていない (Delafosse 1912, Monteil 1924)。この地方がニジェール河谷のようにセゲー王国に組み込まれることがなかったらしいことは、たとえば 1850 年頃にメッカ巡礼から帰ったマルカのマラブー、ママドゥ・カラントオがバニ川南方のダフィン地方でジハードをおしたことを見てもわかる。もしダフィン地方が政治的に空白地帯でなかったら、一介のマラブーがセゲーを相手にジハード起こすことなどとうていできなかったにちがいない。セゲー王国が 1861 年に滅亡した後、1880 年頃にも同じくダフィン地方でブセン・アル・カーリのジハードがおこっている。そのころセゲー王国の版図はトゥクロール帝国に引き継がれていたが、そのときにもやはり南部サバンナは支配下に入っていなかった。こうした間接的な証拠からも、南部サバンナが 19 世紀をとおして、ニジェール河谷の国家的支配か

ら外れた政治的空白地帯をなしていたことがわかるだろう。

上述のように南部サバンナの地域社会が、社会統合の核を独立性の強い村においていたことは、このことと深い関係があるだろう。この地方の村は、上述のように複合的な住民構成をもち、多様なハイアラーキーが併存・交錯する複雑な自治体制をもち、しかも固い防備をそなえていた。こうした体制自体は、恒常的に襲ってくる外敵にさらされた農民社会の適応形態だと見ることができる。

おそらくもともとは小規模な農民の集落が分散していた南部サバンナの社会は、人口密度の高いニジェール河谷のカフのように国家との間に恒常的な関係を築く条件を欠いていただろう。だからセゲーは南部サバンナに直接支配をおよぼさなかったが、反対にいえばそこは、セゲーが自在に略奪の対象とすることのできる地方として温存されたということができるかもしれない。18・19世紀の西アフリカの戦争国家が、直接支配を外れた周辺部に奴隷狩り地帯をもっていたことはよくある例である。とくにセゲーの場合には、上述のように強力な軍団を維持するために恒常的な略奪と奴隷狩りが可能な「草刈り場」が必要だったろう。こうした条件のもとで、たび重なる略奪に対する対応として諸集団の実利的な共同による独立性の強いコンパクトな村が形成されたのではないだろうか。

この地方の農民が、村と村の間にカフのような安定した政治的紐帯を形成しようとしなかったことも、こうした戦争の形態と関係がある。時間的には反復的でも地域的には散発的な襲撃に対しては、むしろ流動性の高い同盟関係の方が有効だったにちがいない。つまり南部サバンナの地域社会は、ニジェール河谷のカフのように軍事国家の内部で適応するのではなく、その外にとどまることで生きのびる適応形態を示しているといえるだろう。

### c. 内陸デルタ

18世紀初めに成立して内陸デルタにまで勢力を広げたセゲー王国は、19世紀初めにフルベ人のジハードによって内陸デルタの支配権を失った。単純に面積で見ると領土の半分を失うような損失だが、不思議なことにそれはセゲー王国にとって甚大なダメージではなかったように思われる。実際セゲー王国はその後も約半世紀にわたって存続した。だとしたら、セゲー王国の内陸デルタへの支配とは何だったのだろうか。

上述のように、内陸デルタの地域社会の統合原理はニジェール河谷とは異なり、親族システムに依拠するものではなかった。それに加えて内陸デルタの人口密度はニジェール河谷より低く、そのためニジェール河谷のように親族集団の抗争がカフの再編成をくり返すような条件はなかったと思われる。しかも内陸デルタはセゲーから100キロ以上も離れており、軍事的介入を契機に直接支配を広げるチャンスもメリットも、多くはなかっただろう。事実ガレは、内陸デルタに対するセゲーの支配が略奪的なものにとどまっていたとしている（Gallais 1967: 91）。だとすればセゲー王国にとって、内陸デルタが支配を離れて対外戦争の対象地域になったとしても、実質的にいって国家の経営上大きなダメージにはならなかっただろう。ジェンネやトンブクトゥに対するセゲーの姿勢も、実質的な支配というよりは権威の誇示のようなものだったのではないだろうか。

しかし内陸デルタは穀物と畜産物、水産物の豊かな生産地である。それを失うことはやはり損失だったのではないだろうか。だがもともとセゲー王国の経営は、地域住民の生産活動に立脚していたわけではない。そうした物資は内陸デルタがセゲーに服属していてもいなくても、商人の活動によってたらされ得た。19世紀半ばに内陸地方との交易の可能性を探って西アフリカを旅行した

アンヌ・ラフネルは、セゲー王国とフルベのイスラーム国家ディーナが交戦状態にあるにもかかわらず、セゲー、ジェンネ、トンプクトゥの間で支障なく交易がおこなわれていることを報告している (Raffenel 1856: 206-8)。

もっとも、戦争のために内陸デルタの交易が滞ることも事実としてあったが、逆にそういう場合には、ニジェール河谷のマルカ商人がかえって利益を得るということもあった。ルネ・カイエが旅行した 1828 年には、南から北に向かうほとんどのキャラバンは、戦闘を避けてジェンネではなくシンサニに向かっていったという (Caillie 1830 tome 2: 88)。要するにセゲー王国は内陸デルタを失っても、対外戦争と略奪による直接的収入と交易による間接的収入に支障を生じたわけではなかったのである。

とはいえ同じくラフネルが記録しているとおり、フルベ人のジハード国家はセゲーにとって最大の軍事的脅威だった (Raffenel 1856: 132)。隣国カアルタはセゲーと同様の政治構造をもち、それゆえに恒常的な仇敵であっても全面戦争の相手ではなかった。だがイスラーム国家ディーナはセゲーとはまったくちがう支配の論理にしたがっていたからである。上述のように、Sarro のバンバラ人は内陸デルタとニジェール河谷の接点に位置するところに軍事化したカフを組織していた。私は Sarro がセゲーにとって情報収集の最前線だったという話を聞いたことがある。セゲーは Sarro の独立を許容することで、危険な隣国と直接対峙を避けたのかもしれない。

#### d. 戦争と商業

最後にセゲー王国の経営に関しては、支配の様式だけでなく商業との関係を見逃すことはできない。

前著 (坂井 2003) で詳しく分析したのでここでは詳述しないが、セゲー王国はムスリム商人の商業活動と緊密な関係をもっていた。略奪と戦争による捕虜は、彼らの手で奴隷として大西洋交易とサハラ交易に出荷されていた。そうした販路がなければ、戦争国家の経済は成り立たない (Meillassoux 1986)。そしてまた商人の手によって輸入される銃、火薬、馬なしには、セゲー王国は圧倒的な軍事力を確保できなかった。だからロジスティックの面からいえば、セゲー王国を支えていたのはニジェール川沿いにバマコ、クリコロ、ニャミナ、シンサニなどの市場町を築いていたソニンケやマルカの商人の商業活動だったわけである。

ニジェール河谷の農民共同体に対する支配のメカニズムがセゲー王国の内的な構造契機をなしていたとすれば、支配領域外に対する戦争と略奪と、それに連動した商人による交易活動は、国家的な構造契機をなしていた。セゲー王国の政治的な存在理由は前者にあったが、経済的な基盤はむしろ後者にあったのだと考えられるだろう。

## 4. まとめにかえて

以上の分析から、18・19 世紀のニジェール川中流域における国家と国家に組み込まれなかった社会との関係を整理し、最後にアフリカの国家形成論の現代的意味について簡単に検討してみよう。



#### 4-1. 国家と非国家の併存

本論の冒頭で国家を形成する社会としない社会との併存はニジェール川中流域の社会の恒常的な状態だったといったが、その具体的な様相は以上の検討から明らかにできたと思う。

親族システムに基礎をおくニジェール河谷の農民社会は、セグー王国と機能的に結合していたが、生産関係の再生産のためにあらゆる資源を長老のコントロール下におく親族システムという農民社会の統合様式それ自体は、国家形成を妨げるベクトルをもっていた。それに対して南部サバンナもやはり国家を形成しなかったが、その流動的な共同という統合様式は強力な戦争国家の略奪に対する適応形態として理解できた。一方、内陸デルタの地域社会は異なる生業集団の儀礼的同盟に基礎をおいており、ロジスティックの面でセグー王国に深く関わっていたにしても、それは国家の統制によるものではなくむしろ自律的に働く交易によるものだった。

このようにニジェール河谷、内陸デルタ、南部サバンナという三つの領域は、どれもそれ自体としては国家を形成しなかったが、それぞれに異なった形でセグー王国と関係していた。それに対してセグー王国の方は、これら三つの国家を形成しなかった領域を背景としなければ、政治的にも経済的にも存続することはできなかっただろう。地域社会それ自体は固有の社会統合の様式をもっており、国家を形成する必然性をもたない、あるいはニジェール河谷のカフのように地域社会はそれを妨げていた。それなのに、そうした地域社会をおおって国家がある。18・19世紀のニジェール川中流域には、国家と非国家がこのようにして併存していたのである。

セグー王国のような国家の存在理由が、ニジェール川中流域の地域的条件に還元できないとするなら、なぜセグー王国のような国家が成立し存続したのか、その存在理由は何だったのか、という疑問が当然湧いてくる。著書（坂井2003）で詳しく論じたとおり、それは17～19世紀の大西洋奴隷貿易という世界史的な状況と結びついていたのである。

セグーという戦争国家は、地域社会の親族システムの発展サイクルにいわば寄生しながら、同時に世界史的な時代状況の中で奴隷生産に特化する国家に成長していった。国家の形成を妨げる親族システムの乗り越えを可能にしたのは、親族システムとは別の論理をもつ若者の平等主義的で目的合理的な組織をもつアソシエーション、つまりトンだったのである。ところで生産構造の持続的再生産を目指す親族システムに対して、機能的アソシエーションとしてのトンの存在理由は共同労働にあっても、その組織としての再生産は儀礼的蕩尽という消費を契機にしている。そのためトンが地域社会を離脱して国家を形成したとき、その国家は地域社会の生産に根ざした内在的な社会統合態としてではなく、地域社会の内外を戦争と商業を介して連結し、地域外からの資源によって自らを再生産しつつ地域内の物的・人的資源を世界経済にむけて流出させる役割を果たす機構として機能することになった。こうした国家のあり方は18・19世紀だけのものではなく、20世紀初頭の植民地国家とその後の独立国家のあり方にも本質的につながっていくものなのである。

#### 4-2. 国家形成論の現代的意味

かつてコクリ＝ヴィドロヴィッチは、「アフリカ的生産様式」の停滞の本質的な要因を、自足的な農民経済と対外交易が分離したまま併存する二元的な構造に見いだした。農民社会の経済と市場経済が水と油のように混ざり合わないことが、低開発の要因だということである。いい方を変えれば、農民経済の骨格をなしている親族システムを、いかにして広域の市場経済の論理に接続できるかが問題だということでもある。一方メイヤスは、同じ問題を別の角度からとらえた。彼が「家族制農耕共同体」論を理論化したのは、農民経済と市場経済の接続が労働力の収奪という形でおこ

なわれ、それが植民地化以前の時代から現代にいたるまで、世界経済におけるアフリカの従属の原因となっていることを主張するためだった。1960年代という独立前後の時代的背景で考えたコクリ＝ヴィドロヴィッチは「発展」という枠組みで問題をとらえ、同じ問題をメイヤスは、1970年代以降のアフリカ諸国の国家運営の失敗を背景に、「従属」という枠組みで考えているといえよう。

それに対して本論では歴史人類学の立場に立って、生産構造の再生産に根ざす親族システムと儀礼的蕩尽によって集団内で富を消費するトンとの相補的結合によって機能する農民社会が、トンを手がかりに親族システムを乗り越えた国家を形成したとき、国家は農民社会の生産と労働力を外部の経済システムに流出させる機構として、農民社会を浪費的な形で世界経済に接続する効果をもつことになったのだという理解を提示した。しかしこのように問題枠組みは変わっても、現実是不変わっていない。農民の経済と世界経済をどのように媒介するのか、それはそのまま現代アフリカの問題なのである。

私の研究の流れからいうと、農民の経済と世界経済の媒介という問題は、植民地支配下で新たな展開を迎えたと思う。本論で指摘したとおり、植民地化以前の時代には両者は離反的に結合していたため、農民社会の労働力が奴隷として引き抜かれ、広域の市場経済に投入されるという形になっていた。そのパターンは植民地国家のもとでも変わりなく、強制労働、徴用、労働移民などの形により広範に広がり、農民社会を解体していった。しかしその動きと並行して、農民社会と国家を媒介するさまざまな中間集団が形成されてくる。それは在来のトンとは異なる指向性をもったアソシエーションで、イスラームの神秘主義教団タリーカの再編成や各種のイスラーム文化団体、そして政党や組合などである。とくに植民地下のセネガルやマリでは、スーフィー・タリーカが中間集団として重要な役割を果たしたように見える (cf. 坂井 2005)。

現代においても、家族親族に強い絆をもつ農民社会と世界経済に左右される国家との間で、有効に機能する中間集団の存在を生み出すことが重要な意味をもっていると考えられるのである。

## 文献

### 歴史文献

Al-Sa'di, Abd al-Rahman b. 'Abd Allah *Ta'arikh as-Soudan*, ed. and trans. O. Houdas, Paris, Adrian-Maisonneuve, 1898-1900.

### 探検記

Park, Mungo 1815 *The Journal of a mission to the Interior of Africa*, London, John Murray, reprint edition, 2000, Durham and London, Duke University Press.

Callié, René 1830 *Journal d'un voyage à Tombouctou et à Jenné dans l'Afrique Centrale*, reprint edition, no date, Paris, Altahir.

Raffeneil, Anne 1856 *Nouveau Voyage dans le Pays des Noirs*, Paris, Napoléon Chaix et Cie..

Binger, Le Capitaine 1892 *Du Niger au Golf du Guinée*, reprint edition, 1980, Paris, Hachette.

### 初期民族誌

Delafosse, Maurice 1912 *Haut-Sénégal-Niger*, Paris, G. P. Maisonneuve et Larose.

Labouret, Henri 1941 *Paysans d'Afrique occidentale*, Paris, Gallimard.

Monteil, Charles 1924 (1977) *Les Bambara du Ségou et du Kaarta*, Paris, Maisonneuve et Larose.

— 1932 (1971) *Une Cité suoudanaise, Djenné, Métropole du delta central du Niger*, Paris, Anthrpos.

## 研究文献

- Amselle, Jean-Loup 1998 Un Etat contre l'Etat: le Keleyadugu, *Cahiers d'Etudes Africaines*, 111-112, XXVIII, 3-4, 463-483.
- Bazin, Jean 1982 Etat guerrier et guerres d'Etat, in J. Bazin and E. Terray (eds.) *Guerres de lignages et guerres d'Etat en Afrique*, Paris, Editions des Archives Contemporaines.
- Coquery-Vidrovitch, Catherine 1969 Recherches sur un mode de production africain, *La Pensée* 144, 61-78.
- Coquery-Vidrovitch, C. and H. Moniot 1974 *L'Afrique Noire: de 1800 à nos jours*, Paris, PUF.
- Gallais, Jean 1960 La signification du village en Afrique soudanienne de L'Ouest, *Cahiers de Sociologie Economique*, 2, 128-162.
- 1967 *Le Delta interieur du Niger*, Mémoires de l'I. F. A. N., no. 79.
- Goody, Jack 1971 *Technology, Tradition and the State in Africa*, Oxford, Oxford University Press.
- Horton, Robin 1971 *Stateless societies in the history of West Africa*, in J. F. A. Ajayi and M. Crowder (eds.) *History of West Africa*, Vol. 1, London, Longman.
- McIntosh, Roderick, J. 1998 *The Peoples of the Middle Niger*, Malden, Massachusetts, Blackwell Publishers Inc.
- McIntosh, Susan, K. 1998 *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*, Cambridge University Press.
- メイヤスー, C. 1977 『家族制共同体の理論：経済人類学の課題』川田順造, 原口武彦訳, 筑摩書房。
- Meillassoux, Claude 1986 *L'Anthropologie de l'esclavage*, Paris, PUF.
- Person, Yves 1968 *Samori: une révolution dyula*, tome 1, Mémoires de l'I. F. A. N., no. 80.
- Sakai, Shinzo 1992 La chute du royaume jawara, in Junzo Kawada (ed.), *Boucle du Niger* 3, Institut de Recherches sur les Langues et les Cultures d'Asie et d'Afrique, Tokyo University of Foreign Studies.
- 坂井信三 1997 「口頭伝承からみたジャ」川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』東京大学出版会。
- 2003 『イスラームと商業の歴史人類学』世界思想社。
- 2005 「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」赤堀雅幸, 東長靖, 堀川徹 (編) 『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会。
- Samake, Maximin 1988 *Kafo et pouvoir lignager chez les Banmana: l'hégémonie gonkorobi dans le Cendugu*, *Cahiers d'Etudes Africaines*, 111-112, XXVIII, 3-4, 331-354.
- Saul, M. and P. Royer 2001 *West African Challenge to Empire: Culture and History in the Volta-Bani Anticolonial War*, Ohio University Press.
- Southall, Aidan 1956 *Alur Society: a Study in Processes and Types of Domination*, Cambridge, Heffer.
- 竹沢尚一郎 1997 「ボゾの歴史と社会」川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』東京大学出版会。
- 2008 『サバンナの河の民：記憶と語りのエスノグラフィ』世界思想社。

付記 本論文は、平成 26 年度 科学研究費助成事業（基盤研究（A））課題番号：24242037 研究課題：「世界史の中のアフリカ史の再構築」（研究代表者 竹沢尚一郎）によって、平成 26 年 10 月 18 日に国立民族学博物館でおこなった研究発表をもとに改稿したものである。